2018 年11 月13 日 C グループ 高橋

山家悠紀夫『景気とは何だろうか』岩波書店2005 年

第一章 景気はなぜ波を打つのか

問題提起

財政・金融政策等による景気の変動 P43

「好況はともかく、不況は一般的にいっても好ましくないものである。企業経営が厳しくなり、倒産が増える。それに伴って失業も増え、人々の生活も厳しくなる。そうしたところから、不況になると、経済をそこから一日も早く脱出させようとして、政府は景気を良くするであろうと思われる政策を色々と採る。」(P43,L9)とあるが、このような状況になってしまうのはなぜか？

このテーマを選んだ理由

景気には波があり、好況のあとには不況が来ると分かっているのなら、倒産などが起こる 前に政策を採ることはできないのかと思ったから。

B グループ： 好況の時に企業は会社を大きくするために設備投資を行ない、稼働率を上げたいので、政府が不況に対する政策をしてもその企業は聞く耳を持たないから。

C グループ： 政府は財政政策や金融政策などで（景気の過熱の防止などを）不況になる前に対策を行っているが、景気は国外の要因（戦争や為替の変動等）によっても変動するので、全てを予測することは難しいため。

D グループ： 景気に波があることは知られているが、その景気変動のタイミングを完全に把握することは難しい上に、不況だと分かったとしても政策の実行には時間を要するから。

A グループ： 好況の後に不況が来るのは分かっているが、不況になるには様々な要因があり、変動を予測するが困難だから。

【小林コメント】鶴見君のレジュメの 2 枚目の中段にもあるように、「市場経済のもつ本質からして景気の波が発生する」（p40，L5）。つまり景気が良くなると加速度的に良くなるが、一度悪くなり始めると加速度的に悪化するという「本質」である。この本質を抑え込んで不況を起こさないようにする政策というのは非常に困難であるということも理解しておきたい。またこれは、あとで出てくる「景気の自律的拡張のメカニズム」（128 頁）とも関連していきます。